（様式）

令和4年度　学校評価　学校関係者評価書

学校園名	三木市立広野幼稚園

1 学校教育目標

「生き生きと活動し、思いやりのある子どもに」
・やさしい子（命あるものを大切にし生き物をかわいがる子・友だちと仲良くする子）
・元気な子（友だちと元気いっぱい遊ぶ子・はっきりと話をしあいさつのできる子）　・がんばる子（自分のことが自分でできる子・最後までやりぬく子）

2 本年度の重点目標

（1）主体的に活動し、夢中になって遊ぶ中で、自分や友だちの良さに気づき、互いに認め合える仲間づくりを目指す。
（2）見通しを持って自分の力でやり遂げる充実感を感じることができるように、幼児理解や環境構成・支援のあり方を探る。

3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している　B：概ね達成している　C：あまり達成していない　D：達成していない 】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組(達成）の状況	評価	改善の方策
教育課程・指導	①それぞれの発達過程や特性を捉え、個々に応じた支援を行う。 ②一人一人が自分のペースで先の見通しを持ちながら活動ができるような支援環境を充実させる。 ③保育の中での個々の幼児理解の読み取りを深める。 ④栽培活動や給食などをとおした食育の推進。	①定期的に、講師の先生を招いての研修会を行い、また、専門機関からの訪問指導を受ける中で、一人一人に沿ったより細やかな支援方法を探っていった。 ②講師の先生のご指導を受けながら、自発的に行動できるような個々に合わせた視覚支援を多く取り入れるようにした。 ③毎日職員会議を行い、一人一人の内面理解を深め、翌日の支援方法について、職員全員が常に共有できるようにした。 ④給食栄養士と相談しながら興味・関心に即した食育を進めていけるように工夫した。	A	①園内外の研修をとおして、教師も主体的に学びを進めていくようにする。主観だけでなく、多面的な方法を探る中で学びを深め、個々に応じた支援方法を学んでいくことが必要である。 ②個々の理解が進んでいく中で支援方法を変化させていきながら支援をしていくことが大切である。 ③教師の経験年数に関係なく、感じたことを率直に伝えあう中で、個々のかかわり方について、より良い支援方法を探りながら、全職員が同じ方向性をもって保育していけるようにする。 ④一粒の豆から、自分たちと同じ命が存在することを感じたり、家庭から届いた稲の苗を育て最後のもみとりまで自分たちで行い食する経験など、実体験を通して食に宿る命を子ども達が実感していけるようにしていくことが大切である。
道徳・人権教育	①毎日の生活の中で自己有用感や自己肯定感を高め自尊感情を育む。 ②感じたことや考えたことなどを全身をとおして表現しあう中で、友だちの感じ方に気づく。 ③自分のことも友だちのことも大事に感じる心を育む。 ④身近な自然や動植物にふれ、命を大切に思う心を育む。	①様々な活動を通して、自分で出来た喜びや達成感を味わえるように、教師も共に喜び合い、認めの言葉を多くかけるようにしていった。 ②全身で表現することを楽しむ中で、一人一人の表現をとおして個々の思いをみんなで感じ合いながら認めあう時間を大切にして、保育を進めていくようにした。 ③生活の中で一人一人の感じ方に寄り沿い、お互いがその思いに気づき合いながら活動を進めていけるようにした。 ④身近な命の大切さに気づけるような声かけや環境を取り入れていくように工夫した。	B	①自発的に活動しやり遂げられるように小さな変化を見落とさずにしっかりと認めて、自信へとつなげていくようにする。 ②様々な感じ方や考え方を大切に受け止め合うことで、一人一人の存在が大切であるという思いにつながっていくように、今後も保育を進めるようにする。 ③自分に思いがあるように、まわりの友だちも一人一人が自分の思いをもっているということを、生活の様々な場面で伝え、友だちの思いを考えられるように支えていくようにする。 ④すいかを収穫した時に、園で飼育しているうさぎやカメ、ザリガニなどにもおすそわけをしに行ったり、弱ったうさぎの様子を気にかける子ども達の姿が見られた。今後も子ども達の実体験をとおした気づきを大切にして保育に取り入れていきたい。
特別支援教育	①それぞれの発達段階や特性に寄り添い、個々に応じた特別支援教育の充実を図る。 ②家庭及び関係諸機関と連携し、発達に応じた支援の方向性や継続した就学の在り方を探る。	①長期的・短期的に細やかな支援計画をたてて、個々の発達に寄りそいながら計画的に保育が進められるように、日々の保育を振り返りながら進めていけるようにした。 ②必要な関係諸機関と連絡をとりあいながら今後の支援方法の進め方について検討していくようにした。また、保護者とも思いを共有しながら日々の保育を進めていった。	B	①一人一人に適した声掛けや支援方法を探る中で、必要な環境構成を整えていくことが大切である。言葉で伝えるだけでなく、目で見て理解し自発的な活動が促されることで自信が持てるような支援を積み重ねていくようする。 ②関係諸機関にも日々の子ども達の様子を細やかに伝えていくようにした。保護者には、毎日の送迎の時間などに、集団での子ども達の姿を丁寧に伝えていき、子ども達に必要な支援の方向性を共有しながら進めていけるようにしていく。
家庭・地域 小学校との 連携	①地域に開かれ信頼される幼稚園を目指す。 ②集団の中での一人一人の育ちの過程を共有し、保護者と共に喜び合える関係づくり。 ③他校種との連携（小学校・中学校・高校）	①来年度の閉園を惜しむ声が多く聞かれ、地域の方に支えられている園であることを改めて実感している。 ②降園時のスピーチやホームページなどで保育の様子を発信していくと共に、個人懇談で一人一人の成長の様子を共に喜び合えることができとても嬉しかった。 ③今年度は、中学生や高校生との交流を行うことができ、小学校とも生活の交流を行えた。	A	①保護者や地域の方に園の様子を継続的に発信する中で、あそびをとおして子ども達の内面が育っていく様子が伝わるように、ホームページをこまめに更新できるように心がけていく。 ②降園時のスピーチには、写真を多く取り入れ、遊びの様子が伝わりやすいように工夫したり、実物をみせるなどして、日々の遊びの中での子ども達の学びが伝わるようにする。 ③様々な人とのあたたかいふれあいの中で、かかわりの力が育まれ、信頼感や愛情を感じられるようにしていく。
健康・安全教育	①身近な危険等について園児の安全意識を高め、自らの命を守り抜くために主体的に行動できる力を育む。 ②危機管理マニュアルの活用と実践的な訓練を実施する。	①毎月、避難訓練を行い、子ども達が自主的に判断できるように、設定保育時だけでなく、自由遊びの時間や園庭に出ている時間など、様々な状況の中で行えるように工夫した。 ②事前に職員の動きや準備物・心構えなどについて職員会議で綿密に話し合い、緊急時の対応に備えた。	A	①園舎が倒壊した場合、保育室から西側に避難する際の経路が大変狭くなるので十分な安全確認が必要であることを確認する。また、園庭には、園の掲揚柱や小学校の巨木が倒れこむ可能性があるため注意が必要である。今後もあらゆる事態に備えて考えていくようにする。 ②職員の人数が少ないので、あらかじめあらゆる想定に応じた対応を考え、個々の動き方について共通認識をしていく。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

〇学校評価の実施方法・自己評価は適正にされている。
〇園児数の減少と廃園となる状況の中ではあるが、その中でも教職員の熱意ある指導と支援が行われている。
〇教職員、児童、保護者を対象としてアンケート結果が明示されており、それぞれの項目において分かりやすい。
〇今年度は、保育を見に行けたことがとても良かった。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<評価Aは妥当である> 〇定期的に講師を招聘し、新任の先生だけではなく、子ども達に関わる先生全てが研修を受けている。 〇発達段階にある園児に必要な支援についての学びを共有し、毎日一人一人の内面理解を共有していることは、家庭にとって心強いと思われる。 〇個々に応じた支援を行えている。 〇取組状況・改善の方策共によく考えて実行し、また更に改善されている。
<心を育む取組である為、その評価は難しいものがあるので、評価Bは概ね妥当とは思われる一方で、取組からは評価Aが適切であるとも思われる> 〇いろいろな体験を通して、子どもたちに命の尊さや他者への思いやりを育む保育をしている。小さな子ども達の社会で、真っすぐに感じたことや考えたことを認め合うような支援には心が洗われるような思いになる。 〇園のうさぎやかめ、ザリガニにすいかをおすそ分けしている姿は、想像するだけで愛おしい気持ちになる。素敵な経験ができている。命を大切に思う心を育めている。 〇子ども達同士、兄弟のように仲が良すぎて時折ケンカになることもあるが、どちらの思いもしっかりと受け止めて、最後は「ごめんね」「いいよ」で素直に仲直りできているのが素敵である。喧嘩をして気持ちがもやもやしても、先生が受け止めてくれる安心感があるからだと思う。先生が密に接することのできる期間に友だちと喧嘩して仲直りをするという経験を積めたというのも大事なことである。子ども達の自己肯定感はもちろんのこと、わが子の頑張っている所や良い所をいつもたくさん伝えてもらうことで、保護者の自己肯定感も高まる。ついつい苦手な部分や心配なことに目がいってしまいそうになるが、先生からの言葉で優しい気持ちになれる。
<評価Bは妥当であると思うが、個々に合わせた丁寧で細やかな支援は評価Aに近いものである> 〇とても丁寧に個々に合わせた対応をしている。保護者はもちろん、関連機関とも連携して、各園児の課題に対して試行錯誤しながら何か良い方法はないかと親身になって考えている。各々園児にとって課題がある中で、それぞれが1年間で大きく成長できていてすごいと感じた。親身になって考えてもらえる安心感が来年度も続いていってほしい。 〇幼児期の子ども達それぞれの発達段階や特性に応じた支援は、常に専門性が求められるものである。細やかな支援計画を立て、専門機関と連携をとって支援方法を検討しているのが分かる。 〇家庭への連絡も丁寧になされており、就学を見据えての支援が行われている。 〇個々に応じた特別支援教育の充実を図れている。
<評価Aは妥当である> 〇閉園を惜しむ声からは幼稚園が地域の方々にとっても頼りになる存在であったことが分かる。 〇トライやる・ウイークで、たくさんの卒園生が希望したと知り、幼稚園で培われた優しさが育っているのだと思った。園児から見ると、大きなお兄さんとお姉さんだが、中学生自身も園児から学ぶことがたくさんあったことと思う。 〇小学生との交流の機会も多くあり、1年生への期待を持つことができると思う。他校種との連携ができている。 〇よく取り組まれている。人は人の中で育っていくものであり、マスク無しでの顔と顔で育っていってほしい。外国籍の園児については、小学校との密な引継ぎが必要である。
<評価Aは概ね妥当である> 〇毎月の避難訓練、職員が少ないことへの準備などがしっかりとされている。限られた時間の中で、身近な危険について、日頃から注視して取り組んでいることは評価に値する。「自分の命は自分で守ること」を積みあげていくことは、とても有効である。 〇避難訓練などを行うことで危機管理できている。